



国語科における「授業開き」について：
教員養成系大学の学生の考える「授業開き」構想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 利晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000458

国語科における「授業開き」について

——教員養成系大学の学生の考える「授業開き」構想——

北海道教育大学札幌校 菅原 利晃

はじめに

学校現場で使われる用語として「授業開き」というものがある（注1）。書店に行けば、「授業開き」の書名をもつ教育図書は数多く見受けられる（注2）。では、「授業開き」とはどのようなものなのか。

一般に、「○○開き」といえば、例えば、「海開き」「山開き」「店開き」などといった語が連想される。「開き」とは、始めることであり、「海開き」であれば、海水浴場の準備が整い、海水浴ができる状態になること、海水浴が始められることを意味する。

しかし、「山開き」では、単に登山道の整備だけではなく、山に対して登山の安全を祈願することが同時に行われる。神職が祈願する儀式をとりおこなうこともある。

「海開き」もまた事故のないように、安全を祈ることが行われている。

つまり、「○○開き」とは、単なる始まりではなく、祈り・願い・決意をこめた、神聖なものではないであろうか。

そうすれば、「授業開き」では、子どものこれから一年間の学習に対する祈り・願い・決意が込められているものといつてよいであろう。

子どもの学力の向上、人間的な成長を期して、教師は年度の初めに「授業開き」をするのである。

一

「授業開き」という語が使われ始めたのはいつからであろうか。

それは、「授業開き」という語がなかった時代であっても、あるいは「授業開き」という事柄への意識がなかった場合であっても、必然的に生まれうる子どもへの学びのアプローチの一つであったにちがいない。

「授業開き」という語を意識せず直接用いなくても、年度初めである四月には、教師は子どもたちに対して様々な学びのアプローチを始めている。例えば、益田勝実は次のように述べている（注3）。

次のページに転載したのは、わたしが以前に書き、高等学校の国語教科書の扉のことばとして掲げていた文章です。（中略）

ここでも、わたしたちは国語を学びます。しかしそれが中・小学校での学習と大きく違うところは、一々が明確に、理論的、系統的、体系的に学び取られる必要があるということなのです。ただ経験的に覚え込むような事柄だけを学ぶのではありません。わたしたちにとって、日本語は、好むと好まざるとにかかわらず、気がついてみれば、その中に生まれており、それによって、物事を伝え合い、物事を考えるようになっていた、民族のことばです。そのことが、ともすると、わたしたちを油断に誘い込みます。国語にはこんなに深い表現があったのか。国語を用いてこんなに緻密に考えることができるのか。国語の背後には、こんなに巨大な、豊かな、言語文化の世界が隠れていたのか。そういうふうな学び取っていくか、いかないかは、あなたがためいめいの大きな問題だと思います。同時に、それは、この国の次の時代を受け継ぎ、日本を、広くアジア、さらに広く全世界に結びつけなが

ら、日本独自のものでそれらへ大きく貢献していくところがなければならぬ、あなたがたの世代全体の問題でもあります。

益田のいう「国語教科書の扉のことば」というのも、年度初めである四月の「授業開き」では、教師が活用する題材の一つである。益田の場合、国語を学ぶことについて、日本語が「民族のことば」であり、国語における「深い表現」に気づくこと、国語を用いて「緻密に考えること」、そして「巨大な、豊かな、言語文化の世界」を感得し、国語を学び取っていくことの重要性を述べている。

また、大村はまは次のように述べている（注4）。

ここは学び舎で、教室なのだから、いくら入学当初とはいえ、本格的にぐつと腰を据えて学習にはいつてもらいたいと思いました。（中略）それで、私を、気をつけること三つ、という話をしました。それを、三か条で、二分三〇秒で話そうと思いました。まだはじめてだから、書かせまいと思いましたが。書きながら聞くなどということができるとかどうかもわかりませんし、最初ですから、聞いていてくれればそれで上々と思えました。

三つの条件とはこういうことです。人の話は黙って聞く、というのが、一番先でした。それから、一ぺんで聞く、ということと、それから、ことばで返事をする。ものを

言ったらこっくりとうなずくといった幼稚園のようなことはやらないということでした。

大村は、中学一年生の国語の初めの授業で、「人の話は黙って聞く」こと、「一ぺんで聞くということ」、「ことばで返事をする」ことという、「気をつけること三つ」を話したという。益田が国語や日本語を学ぶ意義を話しているのに対して、大村は授業のきまりごと・規律を第一に優先しているのである。

ただし、大村のいうそれは、単なる授業規律ではない。それらは、「授業記録」と密接に結びついているのだが、ここで大村の単元学習の中の四月の記録を次にあげてみる(注5)。

例一 単元「あいさつ」(昭和三十九年四月)

一年の最初の学習記録は、何を書いてよいか、どう書いてよいかというまどいなく、かなりの成功感を味わいながら書きつづけ、書く習慣を身につけさせること、そして、学習記録を書いていくうえでの基本的な方法に、自然にひとわり触れ、これから書いていくための基礎をおくことを目的にしている。(中略)

1 時間め(四月八日)

〈板書〉 一、自己紹介

目的 1

目的 2
注意 1
注意 2

二、先生の自己紹介

内容

感想

三、自己紹介には、どんなことを話したらよいか。

○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○

四、私の自己紹介

(14行) (以下略)

ここでは、単元「あいさつ」を設定して、「学習記録」の方法や目的について子どもたちに学ばせている。最初の時間に、「学習記録」の最初のページを書かせているが、単元では「学習記録」に親しむことを一つの目標としている。

さらに一つ、大村の実践をあげてみる(注6)。

例三 単元「中学校国語学習の準備」(昭和四十七年四

月、五月)

1時間め（四月八日）

〈板書〉 一、学習記録をとじる。

二、「国語教育通信」を見る。

(一)「気を付けること三つ」の話をする。

一、人の話を黙って聞くこと。二、話を一ぺんで聞く。三、ことばで返事をする。こつくりをしたり、首を振ったりせず、「はい」とか、「いいません」とか、とにかくことばに出して返事をする。この三つのことを短く軽く話した。(以下略)

大村は、単元「中学校国語学習の準備」の中で、先の例と同じように、「学習記録」についてふれたあとに、「気を付けること三つ」の話をしている。

倉澤栄吉は、次のように述べている(注7)。

子どもにとっては、「聞き初め」である。一人ひとりに自己紹介をさせる「話し初め」は平凡であるし、新入生や新しく編成したクラスには、抵抗が多いだろう。「書き初め」に各人の覚悟の程を書かせるというは、あまり子どもたちに評判がよくない。それより、短い文章でよいから、みんなに与えて「読み初め」といくのはどうだろう。

倉澤は、「授業開き」ではなく、「聞き初め」「話し初め」「書き初め」「読み初め」という語を用いているが、その中で「読み初め」をすすめている。まず最初の授業から、子どもたちに実際に国語の学習活動をさせ、国語の学習への入口へとしているのである。

二

前述のように、「授業開き」において、益田は国語や日本語を学ぶ意義を話しているのに対して、大村は学習記録の方法や目的について子どもたちに学ばせている。さらに、大村は、授業におけるきまりごと・規律を第一としている。倉澤は、子どもたちに「読み初め」など実際に国語の学習活動をさせ、国語の学習への入口へとしている。

これに関連して、例えば、町田守弘は次のように述べている(注8)。

国語学習のいわば楽しさと厳しさ、それを生徒に実感させるということが授業開きの目標になる(中略)学習方法だけを取り立てて最初に徹底するというのではなく、何か実際の授業に即して具体的に指導していく。

町田は、倉澤のいう「読み初め」と同様に、「何か実際の授業に即して具体的に指導していく」ことを述べている。また、菅原稔は次のように述べている(注9)。

「どのような授業をする教師か。」だけではなく、「どのような人柄の教師か。」(中略)言語生活者としての教師自身を語る。

菅原は、「言語生活者としての教師自身を語る」ことが必要であるという。先の大村の単元学習においてもあつたように、子どもたちや教師の自己紹介は多くの教師が行っていることである。これについて倉澤は、前述のように、「一人ひとりに自己紹介をさせる」のは、「平凡である」としてゐる。ただし、菅原がいうのは、「言語生活者としての教師自身を語る」ことであり、単なる自己紹介ではない。教師は、子どもたちにとって、国語を学んだいわば「先輩」であり、「先導者」である。子どもたちがこれから国語を学ぶにあたって、「先輩」「先導者」としての教師の言動に着目するのは、国語を学ぶ意義を知ることにつながるものである。

また、大村の単元学習に関連して、安居總子は、「授業開き」の単元を設定して、次のように述べている(注10)。

とりわけ、小学校から迎え入れる一年生のキッド・ウオッチングは欠かせません。学級担任制で、どちらかかというと総合的に学習が進められ、育てられてきた子どもたちの個々の育ち方・学力・国語力を把握することは、

教科担任制をとっている中学校の国語科教師がまずやらねばならぬことです。(中略)「授業開き」の単元は、次のような趣旨のもとに計画し、展開します。目標は、

(1) 学習者の学力の診断的評価をする。

(2) 中学校の国語学習に必要な、基本的な力をつける。

の二点です。(1)は、小学校で育てられたはずの学力を診断することです。(1)は、小学校で育てられたはずなのに、身につかなかつた言語活動(聞く、話す、話す・聞く、書く、読む)の力を、一人一人確かめながら訓練して身につけさせることです。(中略)四月の十時間、四〇五月の二十時間あたりが目安でしょう。

〈学習活動をスムーズに行うために必要な言語活動〉

聞く ↓ だまる(聞く態度づくり)。最後まで聞く。

話す ↓ 返事をする。伝えたいことを正確に話す。

話す・聞く(コミュニケーション)：ペア、または四人のグループでの話し合いの仕方を身につけさせる。

書く ↓ 一時間にかける量。漢字使用率(二五%が良)。

読む ↓ だまって最後まで読む。一回で読む。

その他 ↓ 国語辞典を使う習慣がある。

安居總子は、中学校における「授業開き」として、「小学校から迎え入れる一年生」への指導を重視している。ここでは、「(1) 学習者の学力の診断的評価をする。(2)

中学校の国語学習に必要な、基本的な力をつける。」の二点をあげている。さらには、〈学習活動をスムーズに行うために必要な言語活動〉として、例えば、「聞く ↓ だまる（聞く態度づくり）。最後まで聞く。」というような活動を示している。これは、前述の大村の単元学習において、「気をつけること三つ」のうちの「人の話は黙って聞く」という事柄と共通する。安居は、大村の述べているような授業のきまりごと・規律を示しているのである。

さらに、町田守弘は次のようにも述べている（注11）。

そこで、「授業開き」ですが、まず学習者に次のような発問を投げかけたらどうでしょうか。

皆さんは国語の授業で身体の中の部分を使っていますか。ただし、「頭」を使うというのはどの教科でも同じです。でもっと「国語」に関わる具体的な身体の一部を挙げてみてください。

町田は、このあと、「耳」から「聞」くへ、「口」から「話」すへ、「目」から「見」るへ、「手」からは少し無理をして書き加えて「書」くへというように、部首や漢字の部分を書き加えるなどしてそれぞれの漢字を作り出し、子どもたちに国語の学びの位置を示している。授業におけるきまりごととしてではなく、国語の学習の方法についてユニークに子どもたちに考えさせている。

ちなみに、町田は「目」から「見」るへ、「見」るから「読む」へと結びつけているが、私見をいえば、「読」の旧字体は「讀」であり、「目」が含まれているので、旧字体を用いる方が他と揃えることができるのではないかと考える。

以上、「授業開き」に関して、先行実践・先行論のいくつかを見てきたが、それらから私見も交えて「授業開き」の具体的な例、ポイントをまとめると次のようになる。

◎ 《教師の視点から》教師の自己紹介

Ⅱ 教師と子どもの、国語を介したコミュニケーションをはかる。

例 自分を語る。自分の体験を語る。自分の言語生活を語る（話すことの実例・模範を示す）。 ※教師の人柄を示す。

◎ 《子どもの視点から》子どもの自己紹介

Ⅱ 子ども同士の、国語を介したコミュニケーションをはかる。

例 課題をあたえる（好きな言葉、好きなことわざ）。一人一人の名前にこだわる。 ※はじめての仲間（集団）の場合かどうかも考慮する

◎ 《授業という視点から》授業の留意事項

Ⅱ 子どもと授業を結びつける。
例 どんな力をつけさせたいかを示す。どのように力

をつけさせたいかを示す（年間指導計画・教材・授業の進め方。これらに関連する授業規律）。国語について子どもの実態をつかむ（好きか嫌いか、読書の取り組みなど）。※一般的な注意は避ける。教師からのメッセージを送る。

◎ 《国語という視点から》言葉の深さ・楽しさ

Ⅱ 子どもと国語を結びつける。

例 教科書の扉の言葉をよむ。教師の好きな詩などを紹介する。教科書以外の教材を用いる。実際の授業に即して具体的に指導していく。学ぶ意義について考えさせる。

三

筆者は、教員養成系大学（北海道教育大学札幌校）の講義「初等国語」の中で、「授業開き」について学生に考えさせた。つぎに、大学生の考える「授業開き」構想を紹介する。

講義では、筆者から前述の先行論・先行研究を紹介し説明を加えた。その上で、講義の最後に課題を与えたものであるが、その課題は次の通りである。

○ 自分ならどんな授業開きをしてみたいか（小学校）。

担任のクラスでの国語の授業の初めとしてください。

学年・人数・男女比などは自由に設定してかまいません

ん。ただし、持ち上がりではない、初対面の子どもたちとの初めての授業として。単元を設定する場合は、その最初の授業として考えて下さい。

受講者は、一六八名である。内訳は、一年生（留学生）一名、二年生百二十四名、三年生二十九名、四年生十名、計百六十四名である。講義はこの人数をほぼ二分し、一講目と二講目との二つにわけて行ったものである。実施時期は、二〇一九年四月十三日である。B6サイズの野線つきの用紙を配付し記入させた。時間はおよそ二〇分ほどである。その中からいくつかをあげておく（以下学生A、Bと略する。以下は、受講学生が書いたままを載せるものである）。

学生A

国語の授業のはじめなので、最初の自己紹介で言っていないくて国語に関係する紹介をする。（好きな四字熟語は一期一会で、一期一会の意味やその言葉に関することの説明して話を広げる。）何人かに好きな四字熟語を聞く。コミュニケーションがとれたら、国語の授業を受ける上での約束や注意を話す。（人の話を聞く時は話している人の方を見る、大きい声で発表する、私語はしないなど。）そして、教科書を開いて教科書の説明に入る。

学生Aは、教師の自己紹介（自分の言語生活を語る）、子どもの自己紹介（好きな言葉、好きなことわざ）、授業の注意事項（話すこと聞くことの注意）、実際の授業という流れである。「教科書の説明」というのがどのような活動をさすかがわからないが、先に示した「授業開き」のポイントをほぼおさえている。

学生B

小学校三年生で男子十六人、女子十四人の形三十人のクラスである。皆、私も含め初対面ということで私から、名前、年齢、出身、好きなものについて語る。その後は、二人一組で、名前と好きなものについて紹介しあって、終わり次第全員の前でペアの子を紹介する。全員が終わったら何人かを名指しして、この子の好きなものは何だったか問う。そして、国語というのは、人の話をきくこと、伝えることの大切さを教える。

学生Bは、教師の自己紹介により、模範を示したあと、子どもの自己紹介をペアで行ったり、好きなものを全員に問うたりしてゲームを取り入れながら話すことに子どもたちの関心を向かわせている。

学生C

国語の学習にも深く関わってくる「読書」をテーマと

した授業開きを行いました。子どもたちは今まで絵本や図鑑、児童書など様々な本にふれてきたと思うので、心に残っている本の内容や今まで見たおもしろい生物など、どんなことでもよいので、本に関することでコミュニケーションをとりたいと思います。教師の自己紹介と例を兼ねてまずは自分の好きな本、好きな写真が載っている本を見せて、自分のことだけでなく「本を読むことの楽しさ、大切さ」を伝えます。子ども達の読書への姿勢なども知ることができまし、今後、読書活動を推進する上での、状況把握もこの活動によってできると思います。

学生Cは、教師の自己紹介として、自分の読書体験・読書生活を語ることを述べている。その上で、子どもの実態をつかみ、学ぶ意義についても触れさせようとしているものである。

学生D

まず最初に教師が自己紹介をする。名前、年齢、好きなスポーツ、食べ物を紹介する。また、これからの一年間をどんな一年間にしたいかを教師が話し、児童全員に同じように自己紹介をさせる。終わったら、誰かに質問する時間をとり、手を挙げさせる。一通り時間をとる。その次に授業を受ける際に重要なことを教える。例えば、

人の話を聞く時は目を見る、人が話している時は話さない。最後に「これから一緒にがんばろうね」と言う。

学生Dは、教師側からの自己紹介のあとに児童の自己紹介を行い、授業規律を示すなどのごく一般的な「授業開き」を示している。問題なのは、まず自己紹介の内容として、学生Aが自己紹介の内容として四字熟語を用いているのに対して、学生Dは言葉に関する事項をとりあげていないことである。また、自己紹介の方法として、学生Dは単に質問という形しかとっておらず、学生Bのように、自己紹介をペアで行ったり、好きなものを全員に問うたりしてゲームを取り入れるなどの国語に関する活動がないことである。したがって、このままでは、子どもたちの国語への関心はそれほど大きくはならないであろう。ここでは、学生Aや学生Bのようなちよつとした活動の工夫があればよいのである（その旨アドバイスを添えて学生に返却した）。

学生E

私は、まず最初に誰しもが知っているような歌をいきなり歌い始めてそのクラスの子どもたちがそれに続いて歌ってくれるのか、それとも歌ってくれないのかによって、クラスの全体の雰囲気をつかみ、その雰囲気に応じて様々な授業開きをしたい。例えば、ノリが良さそうなクラスだった場合、自分の自己紹介の歌をつくってそれを歌うなどし

ていきたいと感じる。

学生Eは、確かに、教師自身を示すことにはなるであろうが、国語の「授業開き」としては、まったく国語の要素がはいっていない。言葉の深さ・楽しさを感じさせるような工夫が必要である。

ただし、音楽を専門とする教師が音楽を用いてこのような「授業開き」をする場合はどうであろうか。国語科に限らず、自己の専門とする教科にもとづいて、「授業開き」をすること。それは、教師本人の個性であり、否定すべきものではないであろう。

おわりに

今後の課題として、つぎの諸点をあげる。

一つ目は、用語の確認である。「授業開き」という語の定義づけや、「単元学習開き」などの語との関連についてである。これらについて、定義づけが必要である、あるいは暗黙の了承があるのだから必要ではないという考えもあるだろう。しかしながら、ある一定の整理は必要であると考ええる。

これに関連して、明治・大正期、あるいは昭和初期・中期までの「授業開き」について、教師にその自覚があったのかどうか、あったとすればどのような授業展開をおこなったのかも今後調査してゆく。また、「アイスブレイク」

という活動についても「授業開き」や「単元学習開き」と共通する要素があるものと想定されるのでこれも含めるかどうか検討する必要がある。

二つ目は、一つ目とも関わるが、単元学習との関連である。例えば、先に示した大村の場合は、「あいさつ」という単元を想定していたが、四月当初の「授業開き」の単元としての位置づけについて、どのような単元がなされたのかを調べ考察してみたい。

三つ目に、小学校、中学校、高等学校の校種における「授業開き」の違いについてである。小学校の場合は、国語科の授業としての「授業開き」が必ずしも設定されているわけではない。その場合は、いわば「学級開き」「クラス開き」「学年開き」が優先されるであろう。最初の国語の授業に関わるとすれば、言葉の学習を念頭に置いた「授業開き」を行う必然性が生じるであろう。

ところで、小学校、中学校、高等学校において、学級担任と教科担任を兼ねている場合には、「学級開き」の中でも国語科の「授業開き」を用いた活動が行われるであろう。入学式・始業式の日の学級活動において、単に自己紹介やあいさつに終わらずに、授業とは別に、国語、言葉にふれさせる。先の例を挙げれば、詩をよんだり、文章を書いたりする。「授業開き」ではなくても、「国語教室開き」がそこにはある。

国語科に限らず、自己の専門とする、あるいは得意とする

る教科にもとづいて、学ぶ場をつくりはじめること。それが、教師本人の個性であり、ゆるぎない教育観に裏打ちされる学びの場のはじまりである。学びの場をいかにつくりはじめるかが、四月当初の学習指導、学級指導の一つの目標であり、使命なのである。

注

(1) 今村久二「授業づくり相談室 四月、単元学習開きに当たって」(『月刊国語教育研究』四八〇、二〇一二年四月)では、「単元学習開き」という語が用いられている。

(2) 本稿では、いわゆる市販の教育図書や商業誌などで扱っている「授業開き」については対象としない。

(3) 益田勝実『国語科教育法』(法政大学通信教育部、発行年不明)による。

(4) 大村はま「中学校国語学習の出發(昭和四十二年十二月 広島県大下学園祇園高校での講演)」『大村はま国語教室 第十一巻』(筑摩書房、一九八三年十月)による。

(5) 大村はま「学習記録への出發」『大村はま国語教室 第十二巻』(筑摩書房、一九八四年一月)による。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 倉澤栄吉『いま教師として』(小学館、一九九三年七月)による。

(8) 町田守弘「わたしの新学期、第一校時」(『月刊国語教育』第一〇巻第一二号/通巻一一四号、東京法令出版、一九九一年二月)による。

(9) 菅原稔「新学期第一校時の国語教室」(『月刊国語教育』第一〇巻第一二号/通巻一一四号、東京法令出版、一九九一年二月)による。

(10) 安居總子「中学校の授業開き」『中学校国語教育相談室』一〇八、光村図書、二〇〇六年四月)による。安居總子には、『授業開きの構造』(光村図書出版、二〇〇八年七月)がある。

(11) 町田守弘「授業づくり相談室 魅力ある授業開き―出会いの季節をどのように彩るか―」(『月刊国語教育研究』四五六、二〇一〇年四月)による。なお、『月刊国語教育研究』四五六では、「検証授業開き」として、ほかに、赤木雅宣「「おもしろ見つけ」で読むことの楽しさを」、廣野昭甫「単元学習を支える「授業開き」の二つの例がある。

※ 本稿では、引用に際して、仮名遣いはそのままとし、漢字の旧字体は適宜新字体にあらためた。また、振り仮名や傍線等は略した。

※ 本稿は、札幌国語教育研究会第1回例会(平成30年6月2日(土))於北海道教育大学札幌駅前サテライト)での発表「札幌国語教育研究会」を開く―開口一番―、

および「授業開き」について」にもとづくものである。
※附記 本稿の作成にあたり、公益財団法人日本教育公務員弘済会より平成31年度日教弘本部奨励金の助成を受けました。

(すがわら・としあき/北海道教育大学札幌校)